

「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

まぜこぜスポーツまるシエから
繋がる広がる
共創と共生の街づくり



一般社団法人ASOBI

#まるをシェアしよう

まぜこぜスポーツまるシェ

わたしたちが本事業で目指しているビジョン

- 「障がい者が多様な人と共に学ぶ生涯学習機会」を生み出すこと
 - 共創と共生が活きたインクルーシブな街づくり・人創りに繋げること
- 生涯学習とは単なる知識の習得ではなく、それを通じて生きることそのものを豊かにする体験行動です。
- 障がい者の生涯学習機会も、障がいの有ろうとも、健常者と同じように自分の学びの意欲を様々な試すことができる「①選択肢」が「②数多く」あり、それらは「③身近な地域のなか」にあつて「④気軽に」通え、「⑤継続的」に存在することが理想です。
- わたしたちASOBIが取り組む生涯学習機会づくりにおいては、障がいや特性による分断ではなく「共有しあう時間と環境」を目指すことによって、上記ビジョンと①～⑤の実現に向けた取り組みを行っています。

障がい者の生涯学習機会の拡大実現のために

- ① インクルーシブな生涯学習機会創出の担い手となる健常者の掘り起こし
- ② インクルーシブな生涯学習機会の地域実装
- ③ 行政や企業を巻き込み、社会全体で支える学習機会の持続化

を目指して挑戦している事業です。

なぜ「スポーツ」なのか

1.心が動くと、人は動く。

- スポーツには、楽しさや笑い、喜び、人との出会いや協力など、心を揺さぶるシーンが多く存在します。
- 障がい者と健常者が共にスポーツ活動を行うことは、同じ時間を過ごし、同じ感情を共有することであり、相互理解の深まりは新たな人間関係の構築につながります。
- 健常者にとっては、これまで知らなかった（=気付いていなかった）障害者の様々な障壁や困りごとを“自分事”として捉えるきっかけとなり、仲間（=障がい者）のためにより良い環境を創ろうとする行動変容につながっていきます。
- 障がい当事者にとっても、多様な人との協働の中で、“支援される側”という存在認識ではなく、社会をより良く変えていく当事者として能動的に行動する支え（仲間）を得ることに繋がります。

なぜ「スポーツ」なのか

2.スポーツが人に合わせる思考への転換

「人がスポーツに合わせる」思考では

- 枠組みの中に収まらない人は、こぼれ落ちていきます。
- 多くの方は、それを仕方がないことと認識してきました。

「スポーツが人に合わせる」（アダプテーション）思考は

- スポーツはこうあるべきだという固定概念に捉われることなく、個々が持つ力を活かす指導方法や手法に視点が切り替わります。



「スポーツが人に合わせる」思考からは

- 障がい者だけでなく、健常者を含めた全ての人にとって、自分らしく成長できる環境が作られます。
- 机上の学びだけでは理解しづらい「ダイバシティ・エクイティ・インクルーシブ」を実践から学ぶことができます。

共に活動することで心の障壁を取り除く

障がい者と共に活動をしたことがない人が感じている不安

- スポーツは全ての人を楽しめるツールであるべきだ、とは思っている。
- 障がい者と一緒にスポーツをすることは、様々な要因のせいで困難だと感じている。
- 医療や福祉の専門知識を学んでいない者が携わるのは困難であると感じている。
- 何か問題が発生した時の責任の所在について不安を感じている。
- 前例のないことは、できればやりたくない。
- 困難と感じている要因の多くはとても「曖昧」で心理的なものが大きい。
- 「身体障がい・知的障がい」を漠然と括り、“個”として捉える視点がない。

考えられる理由

- 障がいのある人と一緒に活動した経験がない（コミュニケーションの経験不足）
- 障がい理解を深める機会がなかったために、社会にある物理的や心理的な障壁への気付きの欠如を生んでおり、気付きの欠如がさらなる障壁を生み出している。

共に活動することで心の障壁を取り除く

取り組み① 不安要素を取り除くための座学の実施

- 障害の医学的特性について
- スポーツレクリエーション、Sports for allの考え方について
- 障がい者へのスポーツ指導の実例や意欲の醸成の実例を聞く
- スポーツがもたらすリカバリーや有意義感について、障がい当事者に語ってもらう
- 多様性ある集団における意見集約の方法を学ぶ

だれもがスポーツを楽しめる環境創りに必要な基礎知識だけでなく、「目の前の人のニーズを汲み取る（決めつけない）」ことの重要性を学びました。



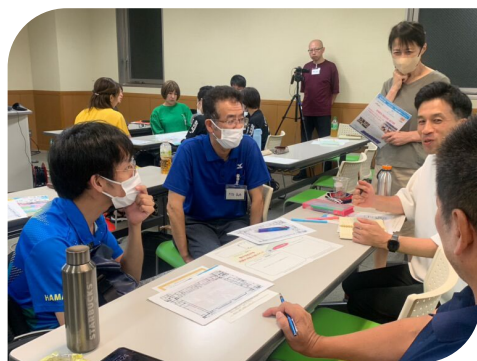
共に活動することで心の障壁を取り除く

主な取り組み② 障がい当事者を交えたチームづくり

まぜこぜスポーツまるシェとは「自分の好きなものを選択」できるスポーツイベント。運営スタッフは参加者の特性に合わせて「手法」や「ルール」をその場で変えながらスポーツの楽しさを提供することを目指します。

- 障がい者を含めたプロジェクトチームで当事者の意見を知る・反映させる
- だれもが楽しめるスポーツプログラムとは何か。だれもが、は可能なのか。
- だれもが楽しめるルールや手法について検討し、新しい形のスポーツを生み出していく

障がい当事者と健常者が同じ目的に向かって取り組むことを通じて、障がいに対する心理的障壁を取り除き、“個”として捉えることに繋がっています。



[まぜこぜスポーツまるシェ]

第1回 2023年10月1日

第2回 2024年1月7日

@浜松アリーナ



ソフトボールに挑戦



全盲のかたと一緒に転がし卓球で対戦！



車椅子から降りてみんなとトランポリンに挑戦！



一緒にやればチームワークが生まれる



さまざまな方法に変化したバレーボール



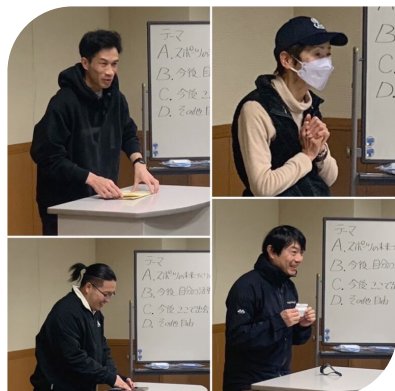
ボランティアスタッフメンバー



声と気持ちを揃えて一齐にキャッチ！



相手のニーズを汲み取りながら



企画から参加した スタッフの声

鋼のルールではなく弾力のあるゴムのようなものを作ればよいことを学んだ。



場づくりの継続の重要性を感じる。私たちの経験値をさらに積み重ねるためにも継続が重要だ。



障がいに関係なくみんなが丸であるという「まるをシェア」する考え方を今後の自分の活動や在り方にも生かしていきたい。

誰もが笑顔で過ごすことができるプログラムを創れたと思う。

多角的な視点から物事を見る大切さに気付かされました。

「できない」にフォーカスするのではなく、この人は何ができるだろうか、どうしたら楽しく関われるようになるのか「できること」にフォーカスして考えるように意識が変わった。

既存のスポーツイベントは健常者を想定しているものが多く、障がい者が参加しにくいものが多々ある。

参加機会の均等に取り組んでいきたい。

これまで健常者と話す機会は多くなかった。企画運営する側に参加するのも初めてだったが、地域や社会を良くしようと行動する仲間と出会い、自分も何か貢献していきたいという気持ちになった。

インクルーシブは「投げる」ではなく「一緒に創ること」だと感じた。
相互理解を深めていきたい。

〈ひろがっています〉

浜松市共催事業 Challenge to インクルーシブへの参画

- 2024年6月に「Challenge to インクルーシブ in 浜松」が行われ、「まぜこぜスポーツまるシェ」に関わったメンバーがインクルーシブスポーツコンテンツを企画から担当し、“みんなの運動会” “みんなのASOBI場”の2プログラムを展開しました。
- 企画や当日においては、はじめて障がい者と活動を共にするボランティアに対して「まぜこぜスポーツまるシェ」の経験メンバーがファシリテーターやリーダー役を務め、「まぜこぜスポーツまるシェ」で得た経験を活かし深める絶好の機会となりました。
- Challenge to インクルーシブの第2回は2025年12月に開催が決定しています。市が行う大規模イベントを追い風として、わたしたちの「まぜこぜスポーツまるシェから繋がる広がる共創と共生の街づくり」では「地域への実装」について取り組みを深化させていきたいと考えています。



持続可能な障がい者の生涯学習機会を目指すために

主な取り組み③ オープン講座の開催

実際に「まぜこぜ」を体験してもらうことで、新たなプロジェクトメンバーを募りました

令和6年度オープニング講座 「見えない壁も超えていける」 パラクライマー小林幸一郎氏とまぜこぜボルダリング体験会



全盲のパラクライマー小林幸一郎氏



アイマスクを付けたペアを声で誘導する



車椅子から降りてチャレンジ！



「実体験に勝るものはなし！」

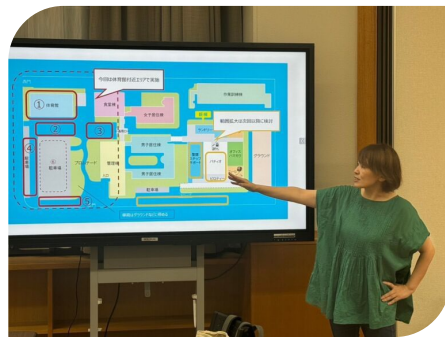
- 明るくワクワクする雰囲気心地よく、気付けば色々なかたとお話することができていた。
- まぜこぜの良さを肌で感じられた。
- 麻痺の半身をかばいながらやる不安があったが挑戦してみて良かった！
- “初めて”と一緒に体験することを通じて、対話の大切さを改めて実感。
- 自然と助け合っている空気感に感動。
- 最初は見学だけのつもりだったけれど、自分も一緒にやりたくなった。

持続可能な障がい者の生涯学習機会を目指すために

主な取り組み④ 知的障がいへの理解を深める

当事者の意見の反映のためにも、多様な障がい種との協働を行っています

聖隷福祉事業団「浜松学園」との協働企画 「まぜこぜスポーツまるシェ in ハマガク」



浜松学園は知的障がい者が寮生活や通所を通じて生活・就労訓練を行う施設です。打ち合わせは寮生の夜の自由時間を使って行われ、台風の影響でリモート会議になることも。取組を通じた彼らの成長はインタビュー調査からも伺うことができます。

[まぜこぜスポーツまるシェ
inハマガク]

2024年9月8日

@聖隷福祉事業団 浜松学園



ボランティアスタッフの人数と学び：

当日従事したスタッフ数 72名

(一般募集からのボランティア参加52名+大学生7名+高校生1名)

(内 障がいのあるスタッフは10名(知的の寮生5名・視覚1名・半身麻痺1名・車椅子3名))

イベント参加者のほとんどは知的障がいのある浜松学園の利用者のほか近隣住民です。週末は自宅に帰宅している寮生も日曜日の夕方に寮へ戻りイベントに参加しました。本事業への参加1年目のボランティアスタッフは2年目のスタッフと共に、知的障がい者の個々の特性や「なにをどうやってみたいか」というニーズを聞き取りながらプログラムの提供を心掛けました。また参加者側(主に浜松学園利用者)からも一緒に体を動かすなかで「こうしたら面白くなるかも!」と提案があがり、それを臨機応変に取り入れてみせることで、主体的に楽しもうとする参加者の姿勢を尊重できたと思います。また、知的障がい者の集団生活の一端に触れたことで、知的障がいの多様な個性の存在を知り、理解を深めることに繋がりました。

障がい者本人(主に企画会議から参加の5名の寮生)の意見の反映について：

企画会議は寮生の自由時間を充てるため任意参加となり、3名からスタートしました。回を重ねると、その様子を見ていた他の寮生が見学や会議に加わり、最終的には5名が中心的メンバーとなりました。企画会議に参加した寮生はイベント当日も早めに自宅から戻り、設営から一緒に取り組みました。どの寮生も、職員や保護者以外の集団のなかで自らの意見を述べる経験が浅く、当初は戸惑いや特性で発語が出にくくなる等ありましたが、徐々に積極性が見られ、臆せずアイデアを出し、試しては改善を話し合うことで新しい競技(お花ダーツ・シャボン玉フェンシング・タイヤボウリング)を考案し、コーナーを作り上げることができました。

イベント当日も能動的に業務を探して担い、率先して参加者を盛り上げるなど、日常訓練の中では得られない成長の姿に施設職員が驚く場面もありました。イベント後のインタビュー調査でも、寮生自身が自分の内面的な変化を感じていたほか、共に活動した仲間の成長を代弁する様子も見受けられました。

持続可能な障がい者の生涯学習機会を目指すために

主な取り組み⑤ 取組の教育現場への導入を模索

障がい理解は、密度の高い関わりと経験の積み重ねによって醸成されます。机上で学んだDE&Iを実感が伴った知識にすることと、青少年年代から共に活動することを当たり前にするために教育現場への導入の必要性を感じています。

浜松学芸中学・高等学校との協働企画 「まぜこぜスポーツまるシエ in 浜松学芸」



スタッフの人数と学び：

当日従事したスタッフ数 70名

(生徒34名・教員3名・一般ボランティア24名)

(内 障がいのあるスタッフ4名(視覚・脳性麻痺(電動車いす)・片麻痺・下肢麻痺(手動車いす))

当日は浜松学芸中・高等学校の生徒達が主体となって参加者対応を行い、そのサポートを一般ボランティアが担いました。事業推進メンバーが企画会議のために訪問していた校舎は新しくバリアフリー化されていたため、他施設も改修されていると思い込んでいましたが、当日朝に体育館がバリアフリーではなく出入口までに長い階段があること、スロープがないこと、バリアフリートイレは新館にしか設置されていないことが判明しました。生徒たちも企画段階において環境配慮の視点を持っていなかったことに気付かされ、自分たちの学校内にある多くのバリアの存在を知ることとなりました。

スロープについては、電動車いすのスタッフが車に常備していた簡易スロープと体育備品の体操マットを折り畳んで組み合わせて作り、残った段差は複数人で持ち上げて対応することになりました。トイレについては急遽学校長に掛け合い、新館の鍵を開けていただくことで事なきを得ましたが、体育館から距離が離れてしまう状況となりました。生徒たちにとっては、バリアフリーやユニバーサルデザインとは何かを考える学びとなりました。

生徒たちは様々な障がいを想像しながらプログラムを創りました。当然、頭で考えてきた対応が当てはまらない場面がありながらも、ラグビーコーナーにおいては、視覚障がい者とパス交換を楽しむための工夫を当事者と対話しながら考えて実践・改善・再挑戦をしたり、夢中で何度も繰り返す知的障がい児に対してどのような声掛けや対応をするのがよいかを考えている様子がうかがえました。

またオリジナル競技のスタンディングホッケーでは、電動車いすのフレーム下にボールが潜り込んでしまう危険性を改善するために、その場にあるものでフレームの補強を作り替えるなどの対応が行われました。

初めから完璧を創ることはできません。「これでなければならない」のではなく、その人が力を発揮しやすいように手法や道具を変えて良いことを伝えました。障がいの有る人と一緒に最適値を探そうとする姿勢が伝わり、参加者の「楽しかった!」「やってよかった!」という笑顔を引き出すことができていたように思います。

持続可能な障がい者の生涯学習機会を目指すために

主な取り組み⑥ 取組がもたらす影響や効果を明らかにする

本取組が参加者にもたらす心理的变化や、インクルーシブな生涯学習機会の創出や共生社会の実現に繋がる影響について明らかにする調査がスタートしました。

聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部 作業療法学科 との協働

「スポーツを通じた交流が共生社会実現にもたらす効果」の調査（継続中）

（研究目的）

本研究の目的は、障害者、健常者、子供、大人、高齢者、その他国籍等の違いを超えた共生社会の実現に向け、取り組みである「まぜこぜスポーツまるシェ」のスタッフ、ボランティアスタッフが、このイベントに参加することでの心理的影響および共生社会の実現につながる効果を明らかにしたいと考えた。

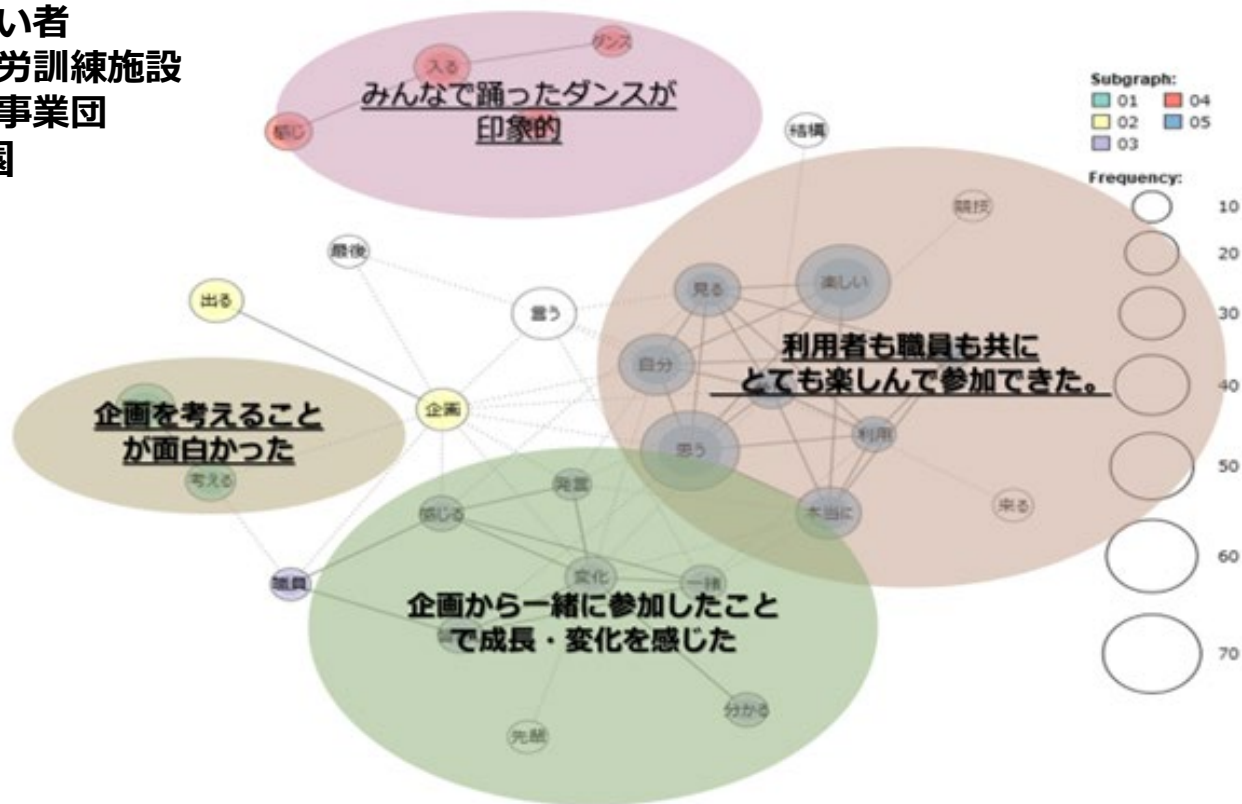
（研究方法）

研究の目的と方法についてご理解を頂き、書面により研究に同意いただいた場合、基本事項についての調査用紙と個別の半構成的インタビューを行った。

インタビューの内容は、主に今まで参加したイベントの感想、意見、参加したことで生活上変化したと感じることなどについて尋ねた。

インタビューは、個別にプライバシーの保護された環境で実施。またインタビューの所要時間は約30分程度、インタビューの内容はICレコーダーにて録音し逐語録に起こし、その後、①テキストマイニング分析（頻出語抽出、共起ネットワーク分析）、②質的記述的分析を行った。

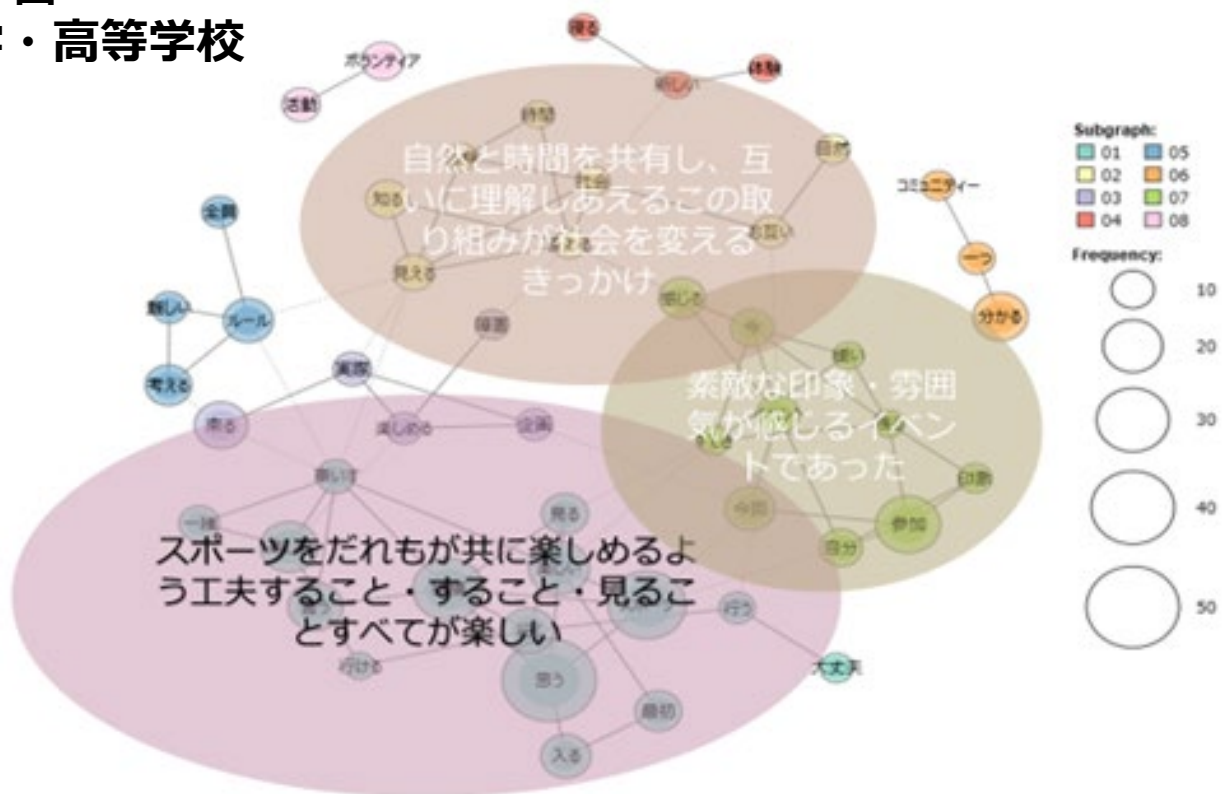
知的障がい者
生活・就労訓練施設
聖隷福祉事業団
浜松学園



浜松学園のまげこぜスポーツまるシエ考察（所感）：

今回、企画の段階から知的障害等をもつ当事者らが参加した。複数の会議を開催する中で、毎回さまざまな意見や自ら積極的に発言するなど、運営の主力メンバーとして活躍していた。インタビューの結果、当事者自身も自らの変化・成長を実感していた。実際、施設内の次の企画に積極的に参加するなどの行動変容がみられ、今回の活動参加が自己効力感の向上に繋がり、コミュニケーション力や遂行力等の社会生活能力の向上の機会になったと考える。職員の発言内容からも、積極性や想像力、発言力、行動力など当事者の変化を感じ、また今まで見られなかった新たなポジティブな側面を発見する機会になったと述べており、当事者たちの成長や社会参加に向け、このような活動参加が大変有効な活動であると実感していた。

学校法人信愛学園 浜松学芸中学・高等学校



浜松学芸中学・高校のまぜこぜスポーツまるシェ考察（所感）：
 高校生ボランティアは、スポーツを媒介として障害者となつながら、共に空間にいることで「スポーツを楽しもう」という参加者とスタッフの共通目標にむけて、さまざまなコミュニケーションを取り、柔軟に行動し、工夫し、自らも共に楽しむ経験となった。この経験は障害者と健常者とのそれまで存在していたあらゆる障壁を溶かし、会場全体の空間と時間が、共生社会の実現の場となっていたと感じる。スポーツ自体がもつ力（楽しい、やりたいという原動力、身体運動を誘発することの心地よさなど）が、「共に楽しむ」というベクトルに会場全体が巻き込まれ、ここちよい自然とみんなともに楽しいという空間を実現したと考える。

(インタビュー分析まとめ)

スポーツまるシェの取り組みは、共生社会の実現にむけ、スポーツを通じ、共通した時間、相互の交流、相互の助け合いが自然と生まれ、共に楽しむ時間に喜びを感じる・・・それが共生社会の実現の一步につながると考える。

- ・ 若い知的障害のボランティア参加は、コミュニケーション力の向上、社会性の向上、自己効力感の向上など、成長につながり、新たな一步を踏み出す機会となったのではないか。
- ・ 高校生ボランティアにとって、障害者の理解、障害者とのコミュニケーションの促進、柔軟な対応力、共生社会に必要な要素の実感・学びとなっている。
- ・ これからの共生社会を創っていくリーダーとしての基盤を身に着ける機会となっていたと考える。
- ・ 一側面だけでなく、多方面からの、多くの方々の参画が、パワーとなり、加速度的に共生社会の実現を創り上げる原動力となっていると考える。

引き続き、参加者の変容を定量的測定も含めて実施していく予定です。



地域への実装に向けた今後の取組

委託事業の目的は「地方公共団体が民間団体と連携し、持続可能な事業実施体制を整備すること」と、「発達段階や障がい種等に応じた学習プログラムの開発やその担い手を育成すること」にあります。

わたしたちは、障がい者の生涯学習の機会について、障害があろうとも健常者と同じように自分の学びの意欲を様々な試すことができる「選択肢」が「数多く」あり、それらは「身近な地域のなか」にあって「気軽に」通えて「継続的」に存在している状況と捉えています。そこで「障がいの有る人と無い人が学びの機会と時間を共有する」ことをファーストステップに定め、地域にある既存の生涯学習の場への展開を目指すこととしました。

わたしたちの取組は、特化型の学習プログラムの開発ではありませんが、担い手となる「人創り」を行う学習プログラムと言えます。

スポーツだけでなく、様々な専門知識を有する指導者や主催者・賛同者が参加していただくことで、障がい者と共に活動ができる経験値が高まれば、そのなかから必ず、障がい特性や成長ニーズに応じた“学びの深化”にも取り組む方が生まれます。それを支援する人材も同時に育成しているといえます。

しかしこの取り組みは「人の気持ちと行動の変容」が起点となっており、“亀の歩み”のように一つ一つを積み重ねていく時間が必要です。

一方で委託事業期間は有限であり、また採択される確約もありません。

取組を持続させるためには、地方公共団体との連携のほか、地域企業との協働も視野に入れる必要性を感じています。この課題解決に地域が一体となり取り組むことが、その過程が、共創と共生が活きたインクルーシブな街づくり・人創りに活かされることは間違いありません。

引き続き、皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

〈補足〉令和6年度ASOBIの主なインクルーシブ活動

インクルーシブをテーマにした主な取り組みをご報告します

令和6年

- 1月7日 第2回まぜこぜスポーツまるシェ (@浜松アリーナ)
- 2月8日 第3回みんなの運動会 (@磐田市アミューズ豊田)
- 2月23日 UDインクルーシブ映画上映会「ライフ・イズ・クライミング」 (@浜松市)
- 3月3日 みんなのASOBI場 (@浜松アリーナ)
- 3月12日 浜松アリーナ健康フェスタ内 みんなのASOBI場
- 4月14日 インクルーシブジュラシックウォーキングフットボール (@浜松アリーナ)
- 5月19日 みんなのASOBI場 (@浜松アリーナ)
- 6月1日 第37回静岡県作業療法学会 特別講座「こんなところにOTが!？」 (@静岡グランシップ)
- 6月9日 企業向けインクルーシブ研修担当 (@静岡文化芸術大学)
- 6月23日 Challenge to インクルーシブin浜松 (@サーラグリーンアリーナ)
- 7月7日 まぜこぜ&ブラインドボルダリング体験会 (@浜松市中央区)
- 7月23日 まぜこぜスポーツまるシェ 浜松学園との企画会議スタート
- 8月8日 浜松市教育委員会 新規採用教職員研修担当
- 8月17日 社会福祉法人復泉会 職員内部研修「まるをシェアする」
- 9月8日 第3回まぜこぜスポーツまるシェinハマガク (@浜松学園)
- 9月26日~ まぜこぜスポーツまるシェ 浜松学芸中・高校との企画会議スタート
- 8月25日 ソーシャルフットボール日本代表全国キャラバンin浜松 運営サポート
- 9月23日 インクルーシブジュラシックウォーキングフットボール (@浜松アリーナ)
- 10月5日 JA共済 ユニバーサルスポーツフェスタ 運営サポート (@草薙総合運動場アリーナ)
- 10月14日 エンジョイフットサルフェスタ (@雄踏総合体育館)
- 11月9日 静岡県主催 パラスポーツ運動会 運営サポート (@富士川体育館)
- 11月16日 浜松東ロータリークラブ主催 金のストリートピアノ インクルーシブコーナー担当
- 11月24日 第4回まぜこぜスポーツまるシェin浜松学芸 (@浜松学芸中学・高等学校)
- 11月27日 浜松市職員自主研修 夜間セミナー「だれでも参加できる共生社会を目指して」
- 12月5・19日 常葉大学浜松キャンパス健康プロデュース学部授業「スポーツで創る育むDE&I」

令和7年

- 2月8日 第4回みんなの運動会

インクルーシブ社会は「箱」を置くことではなくて、

意識と行動変容が“仕組み”を生み出して

仕組みが、意識と行動の変容を“拡大”させていく

**まぜこぜスポーツまるシェから繋がる広がる共創と共生の街づくり
プロジェクトメンバー一同**